

## 12

ブロック内中核拠点病院間における相互交流による  
HIV診療環境の相互評価

研究分担者 池田 和子

国立研究開発法人国立国際医療研究センター

エイズ治療・研究開発センター 看護支援調整職

## 研究要旨

HIV治療の進歩により、ケアも変化している。看護体制は、看護師の慢性的なマンパワー不足、数年で配置交代の育成課題や通院患者数、そして医師の診療体制に影響される。一方で、各ブロック拠点や中核拠点などは地域特性を考慮し行政と連携しながら定期的に会議や研修会などを開催しながら、看護体制整備を工夫して行っている。今年度は、ブロック拠点病院での活動にならい、「中核拠点病院看護管理者会議」を開催し、中核拠点病院の役割や機能、最新治療に加え、HIVコーディネーターナースの役割と育成の現状と課題を紹介し、看護師配置育成の組織としての協力を求めた。首都圏には居住地と異なる場所の医療機関へ通院している患者が多く、長期療養による通院アクセスや合併症管理が課題となっている。東京都主催の看護師等連絡会の活動を紹介し、東京都の課題を共有したり、首都圏内の各県にHIV看護ネットワーク構築を呼びかけた。

## A. 研究目的

HIV感染症の治療の進歩に合わせケア支援方法も変化している。本研究では、薬害エイズ事件の教訓を経て創設された身体心理社会の課題を包括的に対応できるHIVコーディネーターナース（以下、HIV-CN）もしくは研修で知見を得た看護師が全国のブロック・中核・拠点病院に配置されることを目指し、情報提供・育成を行いながらHIV看護のネットワーク構築を目的とするものである。

## B. 研究方法

- 1) 薬害被害者支援について昨年に引き続き、情報提供・交換を効果的に行い、ACC救済医療室との連携を強化する。
- 2) 我が国の患者数が最も多く報告されている首都圏ブロック内の看護課題を把握する。

## （倫理面への配慮）

アンケート及び研修で用いる患者情報について個人が特定できないよう配慮した。

## C. 研究結果

- 1) エイズ治療・研究開発センター（以下、ACC）とブロック拠点病院の管理者向けには年1回（6月第一金曜）、HIV-CN（実務者）向けには年2回（6月第1土曜、3月第2土曜）会議を開催し、薬害被害者支援についての現状と課題を話し合う。管理者からはHIV-CN募集・配置や人材育成が課題となり、HIV-CNからは個別支援の実践が課題となる。話し合われた内容をもとに各ブロック拠点で開催される中核・拠点病院の看護職らを集めた会議や研修会で必要な情報が提供され、ACC救済医療室の取り組みが説明された。またこのような会議に限らず、薬害被害者の個別支援が発生した際や常時、電話やメールなどでやり取りし、全国の薬害被害者支援が行われるようブロック拠点病院と中核拠点病院に連携窓口として看護師の配置を目指す取り組みを行っている。
- 中核拠点病院の看護体制整備について、2012年に改正された後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針（以下、エイズ予防指針）に

基づき、公益財団法人エイズ予防財団にご指導をいただき、同年度から「中核拠点病院連絡調整員養成事業」が開始された。事業内容は、研修事業と全国中核拠点病院連絡調整員会議の2つである。全国会議で実務者から「HIV看護を実践するうえで管理者の理解が不可欠であり、管理者向けの会議開催の要望」があり、令和元年度に「中核拠点病院看護管理者会議」を開催し、全60施設中38施設から61名が参加した。

#### <プログラム>

- 我が国におけるエイズ医療体制と中核拠点病院の役割：中山美恵先生（厚生労働省健康局結核感染症課エイズ対策推進室）
- 最新の治療情報と医療課題-合併症管理と長期療養-：白阪琢磨先生（NHO 大阪医療センターHIV/AIDS先端医療開発センター）
- HIVコーディネーターナースの役割と育成の現状と課題：池田和子（国立国際医療研究センターACC）

参加者対象のアンケート結果で「中核拠点病院連絡調整員養成事業」の参加を問い、希望する・検討したいという前向きな意見が多かった（図1）。

- 2) 東京都では、複数の都内HIV担当看護師が発起人となり、2010年からエイズ診療拠点病院看護師等連絡会（以下、連絡会）が開催されている。連絡会への要望は、「看護の視点での情報交換、顔の見える連携のための担当者作り、担当が一人なので院内以外の相談先の確保」であった。通院患者の支援や看護の課題を情報交換し、都内での看護ネットワークが構築されている。話し合いの中で都内の医療機関を受診するHIV患者は、都以外に神奈川県、千葉県、埼玉

県、茨城県や場合によっては全国に存在していた。長期療養課題を話し合う際に、患者の居住地の医療や福祉・介護などとの連携が必要な症例が増えた。そこで東京都のHIV看護体制のさらなる整備に向け、東京都に共催を依頼し、医療体制班で首都圏ブロックの看護師を対象にシンポジウムを開催し、東京、千葉、神奈川、埼玉、茨城、大阪から51名が参加した。

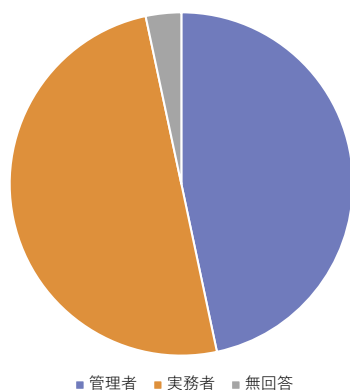
#### <シンポジウム>

HIV感染症看護相互交流シンポジウムー首都圏編ー「連絡会を生かしたHIV感染症看護師ネットワーク作りのヒント」

進行：杉野祐子様（国立国際医療研究センターACC HIVコーディネーターナース）

1. 東京都エイズ診療拠点病院看護師等連絡会について  
荒木宏美様（東京都福祉保健局健康安全部 感染症対策課）
  2. 東京都エイズ診療拠点病院等看護師連絡会参加施設の立場から  
戸蒔祐子様（慶應義塾大学病院 HIV 専従看護師）  
荒木むつみ様（東京慈恵会医科大学附属病院 看護師長）
  3. 千葉県のHIV看護師ネットワークの取り組み  
古谷佳苗様（千葉大学医学部附属病院 看護師）
- 企画や運営、アンケート内容などの検討は連絡会のメンバーに依頼した。参加者対象のアンケート結果では、シンポジウムの内容は概ね好評であり、連絡会で来年度の継続開催の希望が多かった。開催時期・方法など運営については話し合いを続けていく必要がある（図2）。

参加者の立場について



中核拠点病院連絡調整員養成事業  
研修参加について

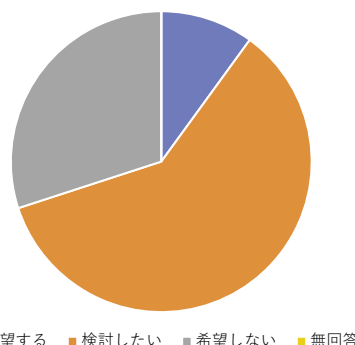
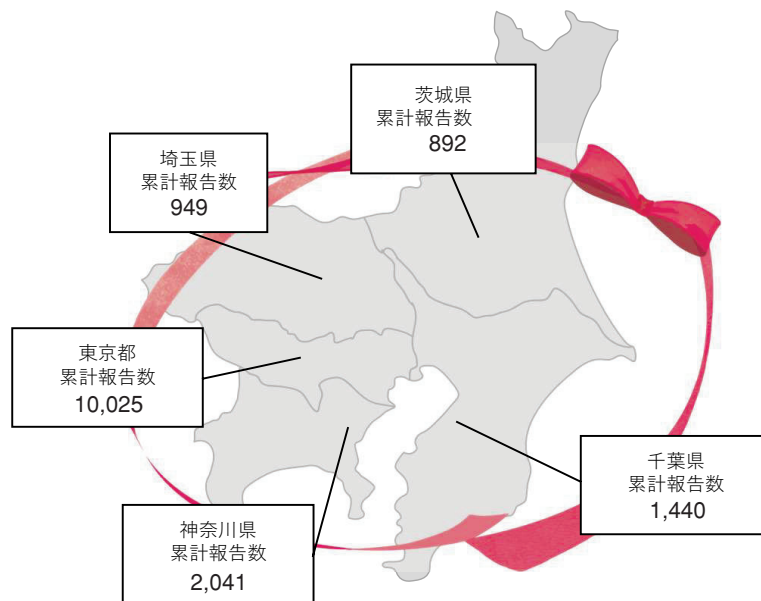


図1 令和元年度中核拠点病院管理者会議 参加者アンケート結果 N=30

「連絡会を生かした、HIV感染症看護師ネットワーク作りのヒント」2019年9月27日



厚生労働省エイズ動向委員会：  
平成30年 HIV感染者およびエイズ患者の都道府県累積報告状況（報告地）

主催：厚生労働行政推進調査事業費補助金エイズ対策政策研究事業  
「HIV感染症の医療体制の整備に関する研究」班 研究代表者 横幕能行  
分担研究：「ブロック内中核拠点病院間における相互交流によるHIV診療環境の相互評価」  
分担研究者 池田和子  
共催：東京都エイズ診療拠点病院看護師等連絡会

図2 HIV感染症看護師相互交流シンポジウム 一首都圏編一

#### D. 考察

薬害被害者数は全国で1432名報告されたが、2018年5月31日時点で生存者は718名となった（参考：血液凝固異常症全国調査平成30年度報告書）。また薬害エイズ事件は1980年代であり、支援にあたる看護師らの中に「薬害エイズ」を知らない世代が増えた。わが国のHIV医療体制は薬害エイズ訴訟の和解以降、再構築されている。薬害エイズ被害の現状と課題に関する情報と個別支援の提供のために本研究班で事態をどう伝えていくか、関係部署とどう連携していくかが重要である。看護体制は、看護師の慢性的なマンパワー不足、数年で配置交代の育成課題や通院患者数、そして医師の診療体制に影響される。一方で、各ブロック拠点や中核拠点などは地域特性を考慮し行政と連携しながら定期的に会議や研修会などを開催している。そこでの最新情報の発信や担当者の引継ぎ、具体的な支援事例の共有が必要である。

薬害被害者の個別支援は医療を中心に介護や福祉との連携が必要であり、その支援方法は前例がないこともある。また、いち医療機関だけでは対応できない課題も多い。国が薬害エイズ訴訟和解後に、作

ったACC内に新たに設けたACC救済医療室に情報を集約される役割を看護師が担えると良い。看護師は患者面接の中で、身体的な課題として治療や病態の把握、心理・社会的な課題として仕事や暮らし、家族らとの関係など生活状況や病気の受け止め、治療意向などを収集している。薬害被害者が通う医療機関で実務を担当する看護師が病院の組織内で役割を果たせるよう育成・配置され、具体的に患者支援につながるよう国や行政の指導のもと、看護管理者へ働きかけを続ける。実務を担当する看護師については数年の期間制限があってもその時期に看護の果たす役割が認識されるよう研修やACCやブロックへの相談窓口体制を紹介し、看護師が孤立することなく継続して育成されるよう取り組む。

首都圏ブロックには、全国のHIV/AIDS患者の半数が報告されている。HIV感染症に限らず、東京都や大阪府、愛知県、福岡県などの都市部には近県からの通院患者とその連携が課題となっている。HIV感染症の特徴として、一般人以外に医療者など支援者も正しい情報が不足し偏見や誤解、いまだに医療拒否などの課題も多く、患者が地元での医療を望まないことがある。しかし長期療養課題には合併症管

理があり、非HIV関連の例えば心筋梗塞や脳血管障害などの病態で救急搬送される事態が複数報告されており、その数は増加することが予想され、医療体制整備が急務である。

首都圏に通院する患者課題の解決に向けて、一都県にこだわらず、近隣の状況や積極的な連携を意識しながら、HIV感染の有無に関係なく患者が安心して療養できる体制整備が求められている。今回、首都圏ブロックの看護師を対象にシンポジウムを開催し、参加者から概ね好評の感想をいただいたが、HIV感染症の情報のupdateを希望する看護師も多く、「最新情報の提供」が期待されていた。一方で一部医療機関にHIV感染者が集中し、診療やケア経験の機会がない実情も再認識した。

長期療養を辿る患者の療養先について患者が住む居宅での例えば訪問看護の導入は非常にスムーズで、訪問看護師がリーダーシップをとり、ヘルパーによる生活援助や往診医による看取りなどが行われている。しかし施設入所は都内でも課題が多く、受け入れ準備には時間がかかる。他疾患の既存の支援ネットワークを活用したり、研修会や受け入れの決定を行う窓口が施設と医療機関との板挟みになっているため、サポートを強化すること。受け入れ前の研修会は必須だが、受け入れ後のフォロー体制として施設側の連絡を待つのではなく、こちらから積極的に連絡をとり、安心を保障することが求められた。支援経験をゼロからイチにするための努力を惜しまず、HIV感染者が安心して適切な療養先で過ごせる体制整備が必要である。

## E. 結論

HIV看護体制整備に向けて、ブロック拠点と中核拠点病院対策を強化することで、徐々に看護実務者のネットワークが広がっていた。引き続き、薬害エイズを風化させることなく関係各所と連携を継続する。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

## 2. 学会発表

### 1. 口頭発表

- 1) 木村聡太、小松賢亮、霧生瑤子、渡邊愛祈、大金美和、池田和子、塚田訓久、照屋勝治、田沼順子、潟永博之、菊池 嘉、岡 慎一. 当院のHIV陽性者に対する心理面接での語りからみるメンタルヘルスの課題ーテキストマイニングを用いた質的研究. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月、熊本.
- 2) 鍵浦文子、喜花伸子、安尾有加、佐々木晃子、池田和子、高山次代、川口 玲、羽柴知恵子、東 政美、城崎真弓、松山亮太、梯 正之. 日本人HIV感染者のうつに関連する要因と精神科の受診率：質問紙調査の結果から. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月、熊本.
- 3) 大杉福子、大金美和、阿部直美、池田和子、久地位寿哉、岩野友里、柿沼章子、大平勝美、田沼順子、潟永博之、藤谷順子、岡 慎一. ACC救済医療室が行った病病連携における薬害HIV感染者と紹介元医療者の満足度調査. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月、熊本.
- 4) 今橋真弓、岡 慎一、伊藤俊広、山本政弘、内藤俊夫、遠藤知之、茂呂 寛、渡邊珠代、渡邊大、藤井輝久、宇佐美雄司、池田和子、吉野宗宏、本田美和子、葛田衣重、三木浩司、四柳 宏、横幕能行. 二次医療圏から考えるエイズ診療拠点病院の配置. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月、熊本.

### 2. ポスター発表

- 1) 池田和子、杉野祐子、谷口 紅、鈴木ひとみ、阿部直美、紅粉真衣、大杉福子、栗田あさみ、大金美和、菊池 嘉、岡 慎一. 訪問看護師を利用したHIV感染症患者の在宅療養支援の傾向. 第33回日本エイズ学会学術集会・総会、2019年11月、熊本.

## H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

### 1. 特許取得

なし

### 2. 実用新案登録

なし

### 3. その他

なし